

漢法苞徳塾資料	No. 305
区分	辨証論
タイトル	六経弁証の基本的な事柄 『傷寒論語釈』 李克紹 他3名著 山東科学技術出版
著者	八木素萌
作成日	

## 1. 太陽病

太陽は皮膚体表を主る。足太陽経は額を上り巔を経て脳に入絡し、還り出て項を下って岐れる。この様な流注であるので、病が皮膚体表に在れば「頭項強痛」を兼ね現わしている症候となる。従って「頭項強痛」を太陽病の主証とするのである。膀胱は太陽の腑であるので太陽病が進行すると熱が膀胱に「結ぼれる」状態になる。これを病が経から腑に入ったと言う。

## 2. 陽明病

陽明は「盛陽」とも言い裏を主る。陽明の腑は胃と大腸である。胃腸の伝導機能が失調すると宿食し、糞便は溜滞し、化熱化燥する。これを「陽明病」とするのである。だから「胃家実」を陽明腑証と称する。陽明は裏を以て主とするが、表裏が共に熱するものを「陽明の経証」と称している。

## 3. 少陽病

少陽は「少火」とも言い、人体を温煦し発達させる養いを行なう。生機の発揚そしてその活動の働きを少火と言い相火と言う。相火は最も条達を喜ぶものであるから、少火が邪を受けると、内に相火が鬱滞し、口苦・咽乾・目眩などの症候を現わす。手と足の少陽経は膻中より岐れて脇肋に布がり循っている。脇肋は半表半裏である。従って邪が少陽を侵すと脇胸苦満・往来寒熱を現わす事になる。これらの病証が、邪が半表半裏に入った少陽病である。

## 4. 太陰病

太陰とは「盛陰」のことで湿を主としている。脾虚脾寒となると胃は津液を循らすことが出来なくなるので、胃中の水穀は「湿」に浸って溜滞する。それで腹満や吐利の症候を現わす。これが太陰病と言われるものである。太陰病は陽明病の反面と言える。大便の秘結は陽明病、自下痢は太陰病、燥気有余で湿気不足するものは陽明病、湿気有余で燥気不足するものは太陰病である。概括すれば実ならば陽明、虚であれば太陰、熱ならば陽明、寒ならば太陰と言うことである。

## 5. 少陰病

少陰の臓は心と腎で、心は神を蔵し火を主り、腎は精を蔵し水を主る。故に少陰の病は水火の「両虚」または「失調」と言う事である。水火が俱に虚すと脈は細微となり、只横臥していたい状態に

なる。両者の失調や、水が火を濟けない、と言う場合には心煩不眠となったり、水気（浮腫）が形成される（火が水邪を抑制できないから）。少陰の水火は生命の内実からの活力を生み出すものであるのみでは無く、体表の陽気を支援し供給している。少陰の水火が虚していなければ、太陽の陽は必ず盛んであるが、心と腎とが（火と水）ともに虚せば太陽の陽は必ず衰える。言い換えれば、少陰は実は太陽の底面なのである。

## 6. 厥陰病

厥陰の臓は肝と心包とで俱に相火を蔵し陰中の陽とされている。心包は良く敷布し、肝は良く条達する。ここで言う「陰中の陽」とは生気を勃々として含んでいる相火であり少陽である。この相火に逆らえば厥陰は病を受けて敷布条達が不能となるから、相火は内に鬱して邪火に変わる。そこで上気し衝心して心中は疼熱するにいたる。そして厥陰病となる。厥陰病と少陽病とは俱に「相火の病」と言うことで、陽気が内向すれば厥陰病、外向すれば少陽病となるのである。病症の現われが上熱下寒し厥熱往来するものは重点が「内」にあるから厥陰病、胸脇苦満し往来寒熱するものは重点が「外」にあるから少陽病となるのである。一つの事柄の二つの現われが実は少陽と厥陰とである。

翻訳 八木素萌

## 参考

	『素問』熱論第31	傷寒論
太陽病	頭項痛 腰脊痛	惡寒 惡風 頭痛 項強 脈浮 表実→惡寒無汗 脈浮緊→麻黄湯 表虚→惡風自汗 脈浮緩→桂枝湯
陽明病	身熱 目疼 鼻乾 不得臥	煩燥口渴 胃腸実熱 經病→大熱・大汗・大渴 脈洪大→白虎湯 腑病→潮熱譫語・腹滿拒按・便秘 脈実沈→→→大・小承気湯
少陽病	胸脇痛而耳聾	往来寒熱 胸脇脹滿 心煩 口苦 欲嘔 咽乾 目眩 兼太陽表証→肢節疼痛 →大・小柴胡湯 兼陽明裏証→腹脹痛便秘→大・小柴胡湯
太陰病	腹滿而噎乾	腹滿 嘔吐 腹瀉 腹痛 脈弱 脾胃虚寒証→理中湯
少陰病	口燥 舌乾而渴	怕冷 倦臥 喜睡 四肢厥冷 脈細微（虚寒証） 心煩不眠口渴咽乾（虚熱）→→黄連阿膠湯 便溏腹瀉食不下（虚寒・腎陽虚）→四逆湯
厥陰病	煩滿而囊縮	消渴 氣上衝 心疼熱 四肢厥冷 飢而不欲食 食則吐 （主証一上熱下寒） 裏虚而寒熱錯雜→烏梅丸

◇太陽表寒実証は陽明に、表寒虚証は少陽に、移行しやすい。少陽は陽明に移行しやすい。  
陽病は太陽陽明合病、太陽少陽合病、少陽陽明合病などの合病を見わすことがある。